

26) イワウチワとイワカガミとイワタバコ＝岩団扇と岩鏡と岩煙草

イワウチワはイワウメ科イワウチワ属の常緑多年草で、本州の中国地方以北のやや深山の山林内や林縁に自生することが多い。また雪解け後の広葉樹林帯などでも大株に生長したものが時折り見られる。日本の固有種であるが、花が美しく春を告げる花として、花言葉が「春の使者」であることなどから、不法に採取されることも多く、最近ではあちこちで危急種に指定されている。特に山梨県では絶滅危惧種に、宮城県、茨城県、三重県、兵庫県では危急種に、東京都、鳥取県では準危惧種に指定されている、というのが現状である。

和名の由来は、岩場に自生することが多く、葉が団扇に似ているためである。学名は『*Shortia uniflora*』で、属名はアメリカの植物学者 C.W. ショートの名に因む。種称辞は「単花の」という意味で、春先に咲かせる漏斗状で先が 5 裂した単性花に由来する。またイワウチワには葉の形状から、オオイワウチワ、コイワウチワ、アマミイワウチワなど、さまざまな亜種が確認されている。

脚本家であると同時に作家でもあった田中澄江の著書『百名山』では、奥多摩 3 山の一つ「大岳山(オホタケ山=1,266m)」を代表する花の一つとして紹介された。また『新・花の百名山』では、雲取山を代表する花として紹介されている。

一方イワカガミは同じくイワウメ科の常緑多年草で、高山植物の一種ではあるものの、北海道から九州までの日本各地の亜高山帯から高山帯の岩場付近に自生する。茎は短く 10~15 cm ほどで、地を這うように生育する所はイワウチワにも似ている。葉は円形または半円形で、細かい鋸歯があり、イワウチワ同様に表面にはツヤがある。初夏、ちょうどイワウチワの花が終わった頃に、淡紅色で 5 弁の花を 5~10 輪やや下向きにつける。また花弁の先は細かく裂けている。和名の由来は岩場に自生し、葉には光沢があるためで、群生することが多い。別称としては「キツネノカオツキ」とか「ムジナノフトン」などとも呼ばれている。学名は『*Shortia soldanelloides*』で、種称辞はイワカガミダマシ属に似たという意味である。

イワカガミも亜種が多く、イワカガミ、コイワカガミ、オオイワカガミの他、ヒメイワカガミ、ヤマイワカガミなどがある。前 3 者は地上性で主に草原に自生し、後 2 者は岩場で多く見られる。ヒメイワカガミは日本海側の多雪地帯に、またヤマイワカガミは太平洋側の寡雪地帯に多く見られるという特性がある。しかし実際に自生している所はどちらも雪解け水や、かなりの湿地帯であることが多く、乾燥地ではあまり見られないようだ。花期、乾燥が続くと花穂をうなだれる所からも、湿地性の種と思われる。

イワタバコはイワタバコ科の多年草で、東北地方以南から台湾にいたる山地の溪谷沿いの湿地や、日のささない所に多く見られる。学名は『*Conandron ramondioides*』で、和名の由来は葉の形状がタバコに似ているためである。また若葉は食用になる。



コイワウチワの花、1,000m 程の高山帯では連休の頃から咲き始める。しかし現在では野生状態の花を見ることは、ほとんどなくなりつつあるのが残念である(長野県軽井沢町)。



オオイワウチワの花、前者よりも葉がずっと大きい(埼玉県深谷市=栽培品)。



コイワウチワだが、この個体だけ花の色が濃く美しかった。



一方、このいウチワは白色で花が大きかった。軽井沢の山林内で咲いていた。



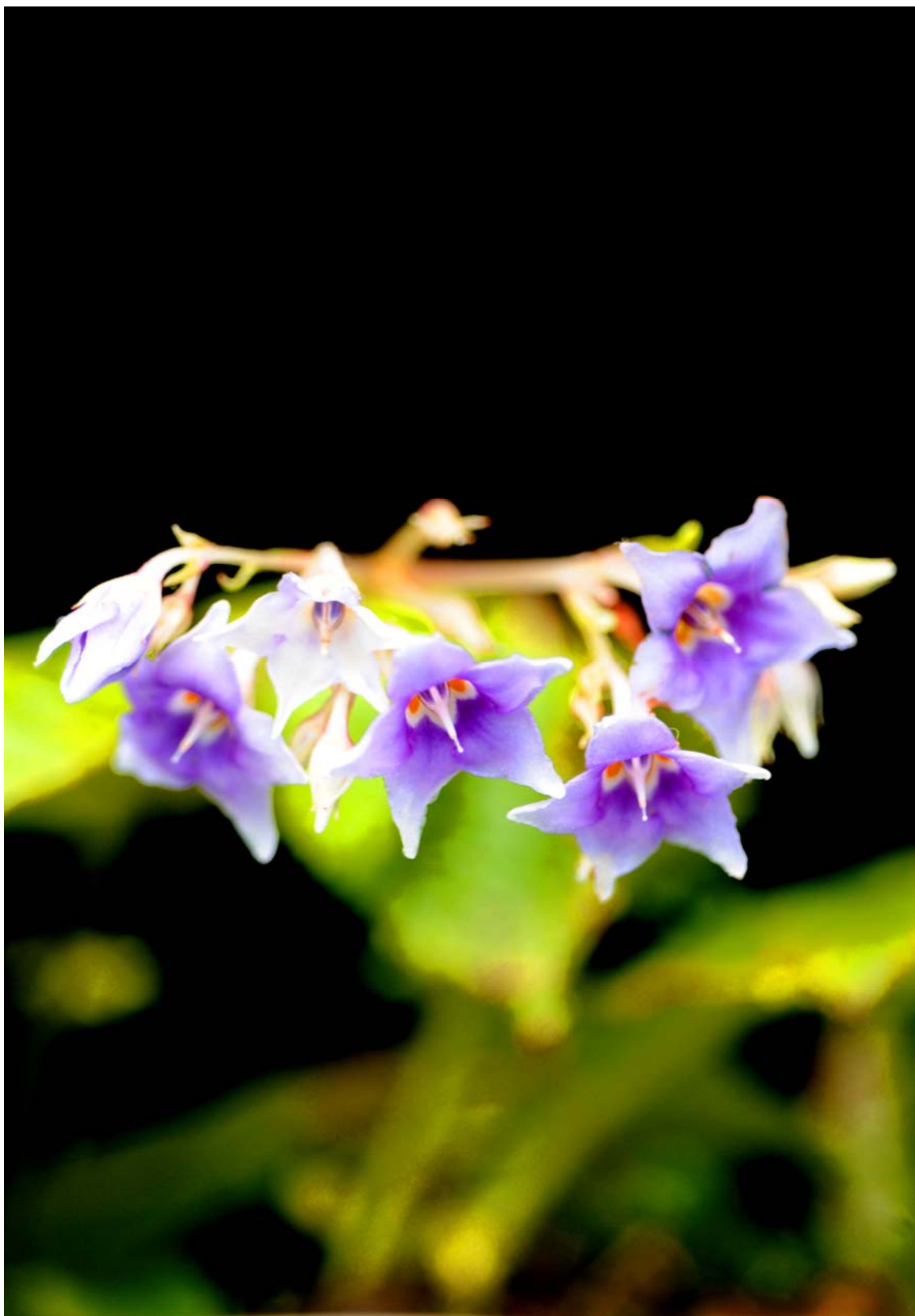
こちらはイワカガミに似るが花色は紫がかっているイワカガミだましである。



イワカガミの花、花弁も葉も細かい切れ込みが多いのが特徴である(栽培品)。



イワタバコは日照を嫌い、日当たりの良い所では葉が黄変してくる。別名はイワヂシャ (岩蒿苳)で、7~8月頃に花径 1.5 cm前後の花を散形花序につける。



イワタバコは咲き出しの花は白みを帯びており、咲き進むに従って花芯部が青紫に変化してくる。この散形花序は垂直することはなく。かなりうつむきがちである。 [目次に戻る](#)